

## 日本は核の傘から出るべきである

カトリック長崎大司教区大司教 高見三明

1945年8月9日、長崎に原爆が投下されたとき、私は母親のお腹の中にいた。母は爆心地となった浦上から2つ3つ山を隔てた場所に住んでいたが、原爆投下の3日後に浦上の実家に行き入市被爆をした。私は祖母、叔母2人、叔母の夫、従兄を原爆で亡くしたが、叔母の1人は遺体も見つからなかった。被爆13年後に亡くなった従兄は死の直前、骨と皮だけにやせ細った姿を私は今でも覚えている。司祭となり、福岡サン・スルピス大神学院で30年間神学生の教育に携わった。被爆国であり、平和憲法を持つ国の宗教者として、私には核兵器廃絶への強い思いがある。

いま日本は核兵器に関連して2つの重要な現実を突きつけられていると、私には感じられる。一つは、国連で行われている核兵器禁止条約交渉に日本が参加しておらず、米国の核の傘の下にある限り日本は条約に加盟できないであろうという悲しむべき現実である。もう一つは北朝鮮が核保有に突き進み、北東アジア地域が非常に緊張が高まっているという現実である。

この二つの現実は、日本自身が核兵器とは何かという本質にもう一度まっすぐに向きあう必要性を示している。

北朝鮮の行動は国連安保理決議違反だとする批判がある。しかし、その批判は表面的な議論だけに終始する危険がある。北朝鮮は核保有国による核攻撃の脅威にさらされていることを理由として核武装を正当化しており、安保理決議は保有国の核兵器を含めたすべての核兵器を問題視する視点をもっていないからである。北朝鮮にも72年前の広島・長崎で被爆した被爆者がいる。

被爆者は自分たちの被害を訴えるのみではなく、同じ苦しみを味わう被爆者を生み出しではならないと訴えてきた。日本政府は、被爆の記憶が強く残るこの北東アジア地域に核兵器が拡散していることの意味を、自らの核兵器依存との関係において深く考えて欲しい。北朝鮮もまた核兵器がどのような兵器であるかを理解する必要がある。

日本政府は核兵器が非人道的であることを認めている。にもかかわらず「核の傘」に依存する政策を続けている。「核の傘」は、報復のために核兵器を使用するという前提によって成り立っている。もし核の撃ち合いが起こったなら、北朝鮮にも日本にも広島や長崎で私たちが味わった以上の惨状が起こるに違いない。それを知りながら、それを前提とした政策を続けることの矛盾を、日本政府は深刻に考えているように見えない。日本が厳しい国際的安全保障環境に置かれていることを私たちも理解する。しかし、何十年もの間、日本政府はこの環境を、「核の傘」に依存しなくてもよい環境に転換する努力をして来なかったのではないだろうか。その無為がいま厳しく問われている。

先日、124名の日本の宗教者は、この現状を打破するために「私たち日本の宗教者は、日

本が『核の傘』依存を止め、北東アジア非核兵器地帯の設立に向かうことを求めます」と題する声明をもって岸田文雄外務大臣に申し入れた。

北東アジア非核兵器地帯の設立が、現在の困難を打開する鍵となる道であると、私たちは信じている。声明に述べたように、「北東アジア非核兵器地帯の設立は、日本の安全を確保しつつ『核の傘』から出ることを可能にする政策である」と考えるからである。このことは、私たち宗教者が述べるまでもなく、すでに多くの学者や研究者が述べてきた。例えば、私の住む長崎においては、長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は、南北朝鮮と日本の3か国が非核兵器地帯を形成し、米国とロシアと中国の3か国が地帯を尊重して核攻撃をしない法的拘束力のある義務を負うというスリー・プラス・スリー構想の非核兵器地帯の一つの可能性として提言した。これによれば、日本は中国や北朝鮮の核兵器の脅威を理由とした「核の傘」を必要としない。また、北朝鮮も核兵器計画に固執することなく米国の核兵器の脅威から解放されることになる。6月28日の本紙オピニオン欄にオーストラリア国立大学のタクール教授が同様の趣旨を投稿されているのを読んで、私たちはいっそう意を強くした。RECNAによれば、北朝鮮が5回の核実験を行った今日においても、この構想は実現可能性を失っていないと言う。

日本が北東アジア非核兵器地帯の設立を提唱したとしても、すぐにそれが実現するわけではない。すでに世界にある5つの非核兵器地帯条約の例をみても、関係国のどれかが提唱してから条約が実際に締結するまで、最低でも交渉のために10年を要している。しかし、提唱することによって、日本は核兵器に依存する政策からの転換を意思表示することになる。核兵器依存からの脱却は、ニューヨークで7月7日に締結された核兵器禁止条約に日本が加盟し推進する側に立つことを可能にする。

宗教者の立場からすれば、このことこそが地獄のような惨状を生き抜いて「ノーモア・ヒバクシャ」を訴えてきた被爆者の声を聴いてきた被爆国日本が最低限に果たさなければならない使命であると考えられる。声明において、私たちは「核兵器は、そのいかなる使用も壊滅的な人道上の結末をもたらすものであり、私たちの宗教的価値、道義的原則に反する…宗教者にとって核兵器の禁止と廃絶は、神聖な責務である」と、宗教者の思いの原点を述べた。